

内側半月板後角剥離骨折の1例

○板倉 巧^(MD) (いたくら たくみ), 辻井 聡^(MD), 米谷 泰一^(MD), 濱田 雅之^(MD)

JCHO 星ヶ丘医療センター 整形外科

内側半月板後角部での剥離骨折を, 受傷後早期に診断ができ, 関節鏡視下に Pull-out 固定施行後, スポーツ復帰した症例を報告する. 11 歳男性 (150cm, 40kg), 陸上部とラグビークラブに所属している. 走り高跳びの踏み切り時に, 右膝に礫音を自覚し, 疼痛が出現した. MRI にて後十字靭帯 (PCL) 脛骨側付着部の剥離骨折疑いとして, 受傷後 6 日目に当院紹介となった. 右膝の腫脹と可動域制限 (0 ~ 90) を認めたが, 関節裂隙の圧痛や靭帯不安定性は認めなかった. X 線では明らかな骨傷を認めず, MRI にて, PCL に明らかな異常を認めなかったが, 内側半月板後角部実質に輝度変化を認め, 脛骨付着部周囲の骨髄内に輝度変化を認めたため, CT 施行し, 内側半月板後角付着部の剥離骨折と診断した. 受傷後 9 日目に関節鏡下に, 半月板実質部に 2-0fiber wire をかけ, 脛骨前内側に Pull-out 固定した. 術後 2 週固定, 4 週免荷の後, 6 週より全荷重とした. 骨癒合を得て, 術後半年でラグビーに復帰, 全国大会に出場した. 内側半月板後角剥離骨折は, 8 例の症例報告があるのみで, その多くが若年者である. また, MRI のみでは受傷後早期の診断は困難とされている. 今回の症例では, 内側半月板後角実質部と骨髄内の輝度変化から, 本骨折を疑い, CT 検査にて診断が可能であった. 若年者において半月板や脛骨骨髄内に輝度変化を呈する場合, 本骨折を念頭においた診断が必要である.